

## <櫻田會通信>

ポーランド便り⑥完:「再び自由民主主義国家としてのポーランドについて—  
1980年代の民主化から2023年総選挙まで」

大東文化大学法学部  
政治学科教授  
武田 知己

第二次世界大戦後のポーランドの歴史を如何に区切るか。これは意外と難しい問題である。しかし、1980年代の民主化運動の進展(以下では、民主化運動の区切りをとりあえず1980年のグダニスクでの労働争議に始まり、1989年のマゾヴィエツキ内閣の組閣までにおく)が決定的に重要なポーランド政治の転換期であることは論者に共通している。そして、前稿で述べた民主政の伝統を巻き込みながら展開したその歴史は、2023年10月15日の選挙に直結している。

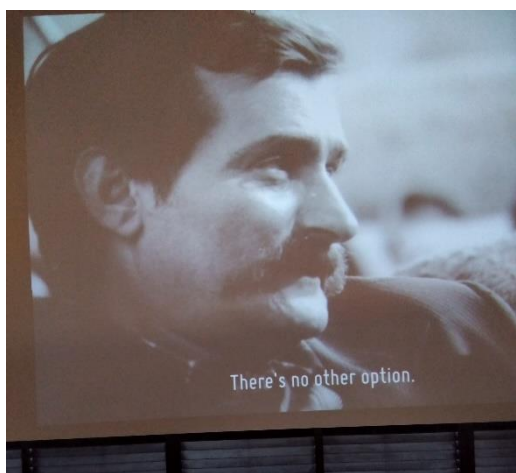
こう書くと、あたかも1947年から1989年までの歴史は「なかったもの」あるいは「間違い」であったかのような言い方になってしまう。しかし、ポーランドに来て、共産主義時代が懐かしいという人に出会ったことがない。実際はいるらしいので、言葉が出来ない筆者とそんな込み入った話をする気にはならなかっただけなのだろうが、一般的にポーランド社会に1947年以後の時代への郷愁があるとは思えない。日本人にとってのポーランドの典型的イメージは、アウシュビッツやワルシャワ蜂起に象徴される「ナチスドイツに蹂躪された国」というものだろうが、ロシア(実際はソ連だが、以下ロシアで統一)への反発が強烈であると知ると、意外な驚きがある。

もっとも、ポーランドはバルト三国のようにロシア支配下に置かれたわけではない。バルト三国の歴史認識は、ロシアに対してポーランドよりもさらに厳しい。「ソヴィエト化」という概念でロシアが押し付けた政治システムを表現することもあるが、ポーランドは、バルト三国と違い、「ソヴィエト化」という程の社会改革はなされなかった。さらに、戦後ポーランドが共産主義を受け容れた背景には、ポーランド側に、共産主義による近代化に魅せられた側面があったことは否定できない。共産主義が世界を席卷し、人々を魅了した歴史を語るには(日本もその例外ではない)、別に専門的で本格的な論考が必要だが、ポーランドもそうした共産主義に魅了された国の一つなのである。

しかし、ポーランドははやくも1956年10月、ロシアあるいは共産主義支配に対する幻滅を抱き、ポズナニでデモを起こした(ポズナニ騒動)。当時、ロシアは日本と国交交渉の大詰めを迎えていた。ソ連の最高指導者フルシチョフは、鳩山一郎、河野一郎、松本俊一らとの交渉の土壇場で席を離れ、ワルシャワ入りする程の慌てようであった。また、同年12月には有名なハンガリー事件が起きているが、実はポズナニ騒動への共感がハンガリー事件の発端だったの

である。

「これは面倒な国だ」と思ったのかどうか、ロシアの衛星国と言う立場から離脱出来たわけではなかったにもかかわらず、ポーランドは、一定の対外開放と国内開発により、「共産主義的消費社会」を実現するに至る。ポーランドは、共産主義時代を通じて、ロシアの言う通りにはならなかった。こちらで出会った日本人からは、当時のソ連とポーランドとでは街の景色が如何に違ったかいろいろ話を伺った。より自由だったというのである。また、ポーランドの方が豊かであったと皆が口を揃えて言っていたのも忘れられない。つまりは、ロシアもそれを許容する方針をとったのである。



また、共産主義時代にも大学生が長期休暇にフランスでアルバイトし、稼ぎを持って戻ってきて授業に出る、そういう生活をしていたという。そうして自由社会の空気を吸うことができたからこそ、共産主義政権下でも、ポーランドは前稿で述べたような民主政の伝統を保持し、精神的に再生産しつづけることができたのであろう。

しかし、経済が借款で成り立ち、債務超過の時代に物資不足でインフレが昂進する中で、ポーランド経済は一貫して危機的状況にあった。

1970年代にもしばしば暴動やデモがおきた。そのような中、1980年8月14日 グダニスクのレーニン造船所で、労働者がストライキに突入した。そのストライキの指導者こそ、その後のポーランド政治史に欠くことのできないレフ・ヴァウエンサ(以下、日本語風にワレサと表記)(写真は、当時のワレサ。グダニスクの連帯博物館で筆者撮影 2023年8月5日筆者撮影。)であった。そして、9月17日、グダニスクで自由労働組合の全国代表者会議が開催され、独立自主管理労働組合「連帯」(ソリダルノシチ)が結成される。優れたリーダーシップを発揮するワレサに率いられ、全国1000万人近くの労働者が加盟したというこの連帯が、ポーランドの民主化の主役となるのである。

連帯の暴走とソ連の介入の双方を懸念したヤルゼルスキー将軍は1981年に戒厳令を敷き、連帯を非合法化するなどして、一旦運動を落ち着かせる。しかし、共産主義体制への不満や民主化の要求は日々高まり、連帯が反体制・民主化への要求は全国から強い支持を受けていることを知る政府は、連帯を中心とした反体制勢力との対話を開始、1988年8月16日、当時の内務大臣キシチャクはワレサと極秘会談を行い、近いうちに円卓会議を開催することで合意するに至った。

この円卓会議が、民主化の80年代を大団円に導く舞台



となった。キシチャクとワレサが共同で議長を務め、1989年2月6日に始まった会議は開会と閉会は閣僚評議会本部(現在の大統領官邸)で行われている。その会場がグダニスクにあるヨーロッパ連帯センターに再現されているが、当時のままの状態で開催された日本製のビデオカメラが日本人の郷愁を誘わずにはおかない(同上)。

政治改革、社会経済政策、労働組合複数制の3分科会で審議が進められたこの会議では、政治改革分科会で、下院(セイム)では、460議席の内、65%(299議席)がポーランド統一労働者党(当時の与党)とその衛星政党に事前配分され、残る35%(161議席)については自由選挙枠とする決定がなされた。また、上院(セナト)が新設され、100議席について、100%自由選挙枠とすることが決められた。

この円卓会議での合意の下行われた選挙の結果は、双方にとって驚くべきものであった。連帯系はセイムの自由選挙枠(161議席)の全議席と、セナト100議席中99議席(残る1議席は無所属候補)を獲得して圧勝したからである。政府側は円卓会議を通じてむしろ連帯側の代表を取り込むことを望んでいたが、会議は民主化=非共産党政権を不可避とする方向へポーランド政治を変えてしまったのであった。選挙後の7月19日に国民議会(上下両院合同議会)が開かれ、ヤルゼルスキー将軍が初代大統領に選出された。首相には、8月24日、連帯顧問で経済学者のマゾヴィエツキが選出され、9月7日に連帯主導の政権が発足する。こうして出発したマゾヴィエツキ内閣は12月30日に、憲法から「党の指導性」条項を削除し、国名をポーランド人民共和国からポーランド共和国(第三共和政)に変更し、国旗を戦前のものに戻した。東中欧諸国初となる非共産党政権が、遂にポーランドの国制を変えた瞬間であった。

※なお、連帯運動に関する充実した新しい博物館がカイヴィツエにもある。シレジア自由と連帯センターという。日本人にはまだ十分に浸透していないようなので、ポーランド現代史に関心のある方は是非押足を運んでいただきたい。

では、なぜ、この歴史が、2023年10月15日の選挙に直結するのか。実は、当時の与党「法と公正」(Prawo i Sprawiedliwość、以下、PiS。なお、メディアでは「法と正義」が一般的だが、本稿では小森田秋夫氏の訳語に従う)と野党の中心となった市民プラットフォーム(Platforma Obywatelska。以下、PO)は、ポスト共産主義の時代を築き、支えた連帯を母体として発展してきた政党なのである。

にもかかわらず、両者は結成された2001年代から激しい対立を繰り返してきている。特に選挙イヤーとなった2023年は、公共放送を通じた与党PiSのあまりにも露骨で下品な野党たたきが、見苦しいほど展開された。対する野党側は、路上で反撃に出るが、彼らの攻撃も決して生ぬるくはなかった。また、筆者は野党が組織した二回の行進(6月4日と10月4日)を見た。10月4日の二回目には実際に行進に参加し、ワルシャワの街中を歩いたが、印象深い熱気に包まれていた。他方で、11月11日にはPiSの支援者たちが多く集まる独立記念の行進にも参加したが、両者を比較してみると、あまりにも支持者の性質が異なり、両者が東欧民

主化の先駆けとなった連帯から生まれた「兄弟政党」であることが信じられないほどである。あるいは根っこが同じだからこそ、これ程仲が悪いのだろうか。つまり、これは近親憎悪あるいは正統と異端と言う問題なのだろうか(写真は、アウシュビッツの路上にあった落書き。2023年7月3日筆者撮影)。



※また、市民プラットフォームは、他のいわゆるリベラル系政党と「市民連合」(Koalicja Obywatelska。以下、KO)と言われる選挙連合を組んでいるが、これは選挙のための団体である。日本のメディアでは「市民連立」が一般的であるが、これも小森田氏に従い、本稿では市民連合とする。日本でいえば、自民党を割った小沢一郎のグループがPOであり、KOがかつての新進党といったところであろうか。

以上を念頭に、1990年以降の歴史を振り返ってみよう。長年ポーランド政治をウォッチされている小森田昭夫氏は、1990-1993年を「ポスト連帯派の多党連立政府時代」、1993-2005年を「ポーランド統一労働者党からの転身派とポスト連帯派の連立政権の政権交代の時代」、そして2005年以降を「ポスト連帯派の二大勢力としてのPiSとPOの時代」と区別している。妥当な区別だと思われる。

一つの危機は、体制転換の危機を克服しなければならない第一期に訪れた。体制転換後の危うさは、いつの時代どの国にも等しく訪れるものである。日本も敗戦の年の1945年、あるいは独立の年の1952年からの数年間は、まさに危機の連続にあった。ポーランドのポスト連帯派各勢力は、この危機にあって、分裂を防ぎつつ、且つよく新体制を支えた。一つの要因は、厚みのある社会運動・市民運動などの政党政治を支える下部組織が発達していたおかげであるとされる。連帯のような労働組織もその一つであるし、他に既に触れたカトリック教会、また農民たちのネットワーク、知識人、スカウト、様々な協同組合などがそうである。政治学・社会学でいう「アソシエーション」が相互に重複するように豊かに発達し、それらが維持されていたことが、ポーランド民主化成功の一因である。

特に重要だったのは、全国をつなぐカトリック教会の役割である。共産主義体制下でも許されたカトリック教会は、何よりも人々の憩いの場であり、政府情報とは異なる情報(西側からもたらされる情報を含む)を入手する場であり、そして様々な地下運動をネットワークする場であった。それが、民主化を支える人々を緩やかに繋いでいた。また、当時のローマ教皇ヨハネパウロ二世がポーランド人であり、連帯運動や民主化運動を全面的に支持したことも大きい。ヨハネパウロ二世は、ポーランド民主化を応援し、無事に終着させるまで精神的に支援し、国民に絶大な勇気を与え続けた。彼の存在は民主化の成功に欠かせなかった(次ページの写真は連帯



博物館の正門、連帯のロゴとヨハネパウロ教皇の写真が両者の関係を象徴している。(筆者撮影)。

しかし、そうした各組織は個別利益を表出する多数の政党の発生を促した。1991年には政党数が何と100を超えている。政府は連立であるほかなく、政権は安定を欠きがちとなる。その間隙を縫って、旧勢力(旧労働者統一党勢力なので「左派」と呼ばれる)が国民の期待を受けて台頭し、連帯を組みながら、「右派」(ポスト連帯系)の連合政権と交互に政権に就く第二期が始まる。

第二期において、左派に対抗すべく、右派が大同団結して誕生したのが、PO、次いで PiS である。2001年の総選挙対策であった。しかし、連帯系勢力が分裂したため、2001年には左派連合が勝利する。

第三期の始まりを告げたのが、大同団結をしたポスト連帯派の一方の雄である PiS が政権をとった 2005 年である。しかし、当然というべきか、同年 9 月の選挙で第一党(155 議席)となった PiS は、第二党となった PO(133 議席)ではなく、自衛、ポーランド家族連合といった政治的主張の面でいわゆる「右派」的な政党と連立を組むことを選択する。その背景には、2004年の EU 加盟があった。つまり、ヨーロッパで必ずしも中心的位置にいないポーランド(ポーランドとヨーロッパの関係については「ポーランド便り④」を参照)を主張できるのは、「強いポーランド」を標榜する文字通りの右派であると PiS は見なした。彼らの対外政策は、図式的に言えば、EU への対抗、反ロシア、そして親米を基礎とする。

これに対し、野党 PO は、親 EU、対ロシア緊張緩和、アメリカへの接近については条件付きでの賛成を選択することとなる。こうした対外政策の対比は、特に 2007 年 10 月の選挙で 209 議席を獲得し、ポーランド農民党と組んで成立したトゥスク政権(ちなみに 2011 年の選挙でも PO が勝利し、農民党との連立が継続し、トゥスク政権は、6 年 10 か月の長期連立政権となった)で明らかとなった。

2015 年 5 月の大統領選でアンジェイ・ドゥダが当選し、同年 10 月の総選挙で PiS が 235 議席を得て勝利すると(PO は 138 議席)、PiS は政権に返り咲くこととなる。同政権も 2023 年 12 月まで 7 年 7 か月続く長期政権となった。PiS のモラヴィエツキ政権は、2014 年のクリミア併合を受け、NATO の重要性を殊更に強調した。NATO は、冷戦を終え、価値の協同体を標榜し、東方拡大を続けていたが、ロシアの衛星国という頸木をいち早く逃れたポーランドは、自らが「力の空白」となる事を恐れ、ヴィシエグラード諸国と共に 1999 年に NATO にいち早く加盟していた。2014 年のクリミア併合はポーランドの懸念をさらに増加させた。前に触れたポーランド領内の米軍基地は、トゥスク政権で外相を務めたラドスワフ・シコルスキが提案したのに端を発するが、2016 年、NATO のワルシャワサミットで、PiS 政権が受け入れを正式に決定した。トゥスクがアメリカの東方進出に条件付きで賛成するのに対し、PiS は



アメリカの呼び込みにもっと積極的で、のちにドゥダはトランプ好きを公言するようになる。

国内政策についても、両者の違いは鮮明である。PiS は親 EU 的な政策の恩恵を受けることのない中小企業、農民層に目を向け、補助金政策を通じたバラマキ政策を行った。また、PiS 政権の特徴は、その強権的な姿勢であった。まずは憲法法院を政権寄りとし、民主的手続きを踏まずに立法化することが増えた。PiS の露骨なバラマキ政策の一つである「家族手当+500」がそうした強権的立法化の例として有名である。

他方で PiS の支持率は 45%に及んだ。この政策の岩盤支持層は比較的貧困層を抱える東部であった。東部の農民は、親 EU 政策でほとんど何の恩恵も受けない層である。PO が都市部、PiS が東部農村をそれぞれ支持基盤とするという特徴が生まれていく。

2019 年の欧州議会選挙前には、PiS は EU への違和感をより鮮明に主張するようになる。特に 2015 年の難民危機は対 EU 強硬論の支持を広げる役割を果たした。他方で、PO は民主左派同盟や農民党といった親 EU 勢力を幅広い結集し、ヨーロッパ連合(KE)として選挙対策を計る。結果、第一党は PiS であったが KE は大幅に議席を伸ばし、第三党と併せると PiS に匹敵する得票を得た。同じことは同年の総選挙にも当てはまった。PO 以下、左派、ポーランド連合と言った親 EU のリベラル勢力を結集すると、PiS の得票率を越えるところまで勢力を伸ばしてきたのである。

以上をまとめれば、2023 年までに、三つの事が明らかとなったと言える。第一に、第三期においてはポスト連帯派の二大勢力の分断が進んだことである。第二に、その二大勢力を軸に、小勢力の分断も見られることである。第三に、PiS に対抗する親 EU 勢力が結集すれば、PiS に十分対抗しうることである。翌 2020 年の大統領選挙でも、急遽出馬を決めた現ワルシャワ市長のラファル・チャスコフスキが決選投票においてドゥダに得票数で肉薄したことは PO 及び KO を勇気づけた。

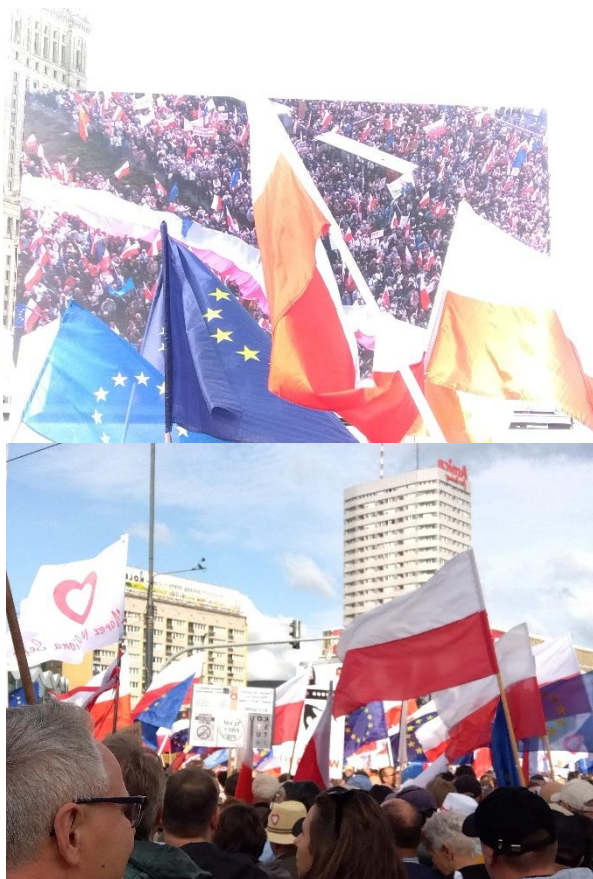
しかし、以上を逆に言えば、PiS はいわゆる右派と組むことで、親 EU でリベラルな野党勢力に打ち勝つことが出来る。連盟と言われる排外主義的ナショナリストで急進的自由経済主義を標榜する勢力が PiS と緩やかに提携し、PiS は多くの政治学者から警戒される右派ポピュリズム的な政党とみなされるようになっていた。

2023 年の選挙はこうした流れで行われたものであった。PO が他のリベラル勢力と選挙連合を組むことは分かっていた。そしてその連合が首尾よく結成されれば、89 年以來初となる 3 期目の長期戦権を狙う PiS をねじ伏せることが出来るかもしれない。他方で、それが政権を脅かしかねないことを知っていた PiS の警戒心も並大抵のものではなかった。もし右派的な連盟が議席を獲得し、自分たちと連携すれば、KO をねじ伏せ





られる。できれば、最初から右派的な世論を取り込みたい。PiS は 2023 年を通じてウクライナ問題やベラルーシの国境問題でかなりタカ派的な発言を繰り返すが、それは、一面で自らを指示する右派層が連盟支持に流れることを警戒すると同時に他方では連盟との連携に布石であったと考えられる(前ページの写真はベラルーシ国境問題を使ったアグネシュカホランドの「緑の国境」。PiS はこの映画の公開前からこの映画に対する批判を繰り返し広げた。筆者は 11 月に実際に国境を訪れ、人道支援団体の活動を垣間見ることが出来た。2023 年 10 月 30 日筆者撮影)。



こうした対立構造の中、野党側は 2023 年に二度の大規模行進を企てた。特に 10 月 4 日の行進は、ワルシャワに親 EU、リベラル勢力が結集した感があった。写真を見ると、ポーランドの国旗とともに EU 旗が多数みられるのが分かる。またプラカードには政権を揶揄する言葉が掲げられ、お互いに政権を批判しながら更新した。しかし、行進は穏やかで、危険を感じることはなかったし、親ヨーロッパでエスプリの効いた反対行動であった。他方、与党側は公共放送を利用した逆宣伝を繰り返した。その様子は、露骨で誠に下品であった。特にトウスクへの個人攻撃は度を越していたように思われる。また総選挙後であるが、PiS の支持者が多数集まる独立記念日の行進に参加した際は、全く異なる様子の行進であった。まず、EU 旗が一つも見られない。ポーランドの独立記念日だから当然と言えば当然

なのかもしれないが、問題は雰囲気である。まず、墮胎を終えた直後の赤ん坊を映し出した中絶反対の巨大な写真が掲げられているのにやや辟易した。しかも、私の目の前で、そののぼり旗に火がつけられた。発煙筒を持ち練り歩く人や、爆竹を鳴らす人も少なくない。筆者は、14 年前にロンドンで経験したサッカーのフーリガンたちの騒動と雰囲気がそっくりだと思った。



実際に警官との小さな小競り合いがあったようである。支持者の一般的な傾向がこれからもうかがえる(写真は、10月1日のKO主催の行進と、11月11日の行進の様子。筆者撮影)。

さて、歴史的な結果となった今回の選挙であるが、重要な争点は、強権が目につきはじめた政治体制を変えるのかどうかであったと考えられる。筆者の実感としては、細かな政策が真剣に問われたというよりは、かつての権威主義体制を彷彿とさせる政権を打倒するか、それとも「強いポーランド」をヨーロッパに対して主張するのかという選択が最も重要であったように思える。それは、抑圧されてきたポーランドのナショナリズムと、80年代のポーランドを民主化させ、西側に引き戻した「自由への渴望」との対立とも言えようか。

※小森田氏もこの選挙で、POらを称するのに、「民主的反对派」(Opozycja demokratyczna)という言葉が使われたことに着目している。この言葉は、かつて共産主義時代に統一労働者党政権に対抗する勢力に対して使われた言葉である。小森田氏が言うように、野党側はPiSをかつての共産主義政権になぞらえ、自由の回復、法の支配の復活を目指して、結集しようとしていたのである。

結果は、驚くべきものであった。まずは、投票率である。74.4%という投票率は、1989年以来最高であった。1989年6月4日の歴史的投票の時も、62.7%に過ぎなかったのである。投票時間は21時で終わったが、21時までに投票所に向かえば投票できる。動員がかけられたことは間違いないが、テレビは21時を過ぎても長い行列を組む投票所を映し出した。筆者のアパートの近くの投票所にも長い列ができていたに忘れられない。

次に驚くべきは18-29歳の若年層の投票率の高さである。4年前の46.4%から、今回は68.8%に急上昇した。しかも、彼らのPiS支持は14.9%に過ぎない。若者が「自分事」として今回の選挙をとらえ、PiSではなく野党側＝親EUのリベラル派を選択したというのが印象的であった。

最後に、党派別の結果である。第一党はPiSであり、194議席を獲得した。第2党はPOを中心とした市民連合であり、157議席。そして第三党に65議席を獲得した第三の道が食い込み、民主的野党と言われる勢力の一つ「新しい左翼」が4位、一部では有力視されたウルトラ右派の「連盟」は第5党に終わったのである。

以上をまとめれば、PiSという強力な与党に対する民主的野党が勝利したと言ってよいが、それを支えた大きな勢力が若年層であったということである。選挙の翌々日だったか、ワルシャワ大学で教員や学生が、選挙結果を祝してお互いに抱き合う姿も見られた。この間、公共放送は「PiSの勝利」を一貫して放送し続けたのと対照的であった。

もっとも、PiSが牛耳っていた公共放送が言う通り、議会第一党はあくまで彼らであるから彼らは負けてはいなかった。ドゥダ大統領は再びモラヴィエツキを首相に指名することが予想されたが、実際のそのようになった。しかし、この後の手続きを考えれば、民主的反对派が結束



を崩さない限り、首相は彼を否決し、下院が最終的に首相を指名できる。野党側は候補をトウスクとすることで合意し、12月12日には実際にトウスク政権が誕生した。こうして歴史的選挙は、劇的と言ってよい政権交代を齎したのである(写真は12月12日首相に指名されたトウスク氏)。



私事であるが、筆者は、1980年代後半に大学に通い、90年代初頭の細川護熙内閣の誕生をみて、政治に興味を持った。今回のポーランドの総選挙では、既に失われてしまった感のあるあの頃の熱意を彷彿とさせるものがあったように感じる。

他方で、あのころの日本とは異なる政治の姿もあった。第一に、あまりにも深い党派の溝である。その溝を埋めることは困難を極めるであろう。実際、ポーランド議会でもまた公共放送の在り方をめぐっても一波乱おきており、正常化までにはもうしばらくかかるだろう。第二に、国のアイデンティティの問題が争点になるという点である。今回の争点はPiSか民主的反对派かという選択だったとしても、新しい政権下では「ヨーロッパと自分」、すなわち「西側におけるポーランドとは何か」という問題に対処せざるを得ない。終焉を見据えつつあるかもしれないウクライナ戦争への対応や2024年に控えているアメリカ大統領選挙が与える影響などにも対処しながら、ポーランドは古くて新しいこの課題に取り組みねばならない。それが直ぐに解決するはずはない。

翻って、ポーランド政治と比較してわが国の政治を顧みたま時、筆者の脳裏に去来するのは、整理しきれない複雑な感情である。若者の政治離れを批判するほど筆者は老成していないつもりである。しかし、この投票率を見て衝撃を受けないわけにはいかない。また、ポーランド政治をめぐる与党野党双方を支える同志的結合の強さ、その豊かさにも忘れがたい印象を受けた。他方で、国情の相違は否定しきれない。自由民主主義は各国の伝統の上に花開くのであり、単純な移植はできない。やはり、日本は日本なりの道を探り、停滞を打破しないとならないだろう。安易な比較は慎むべきであると思い返し、考えは定まらない。

ただ、一つ言えることはある。それは、政治への不信あるいは諦観が広まっている日本であるが、分断やアイデンティティの問題とも最早無縁ではないと思われることだ。そんな時、ポーランドが行った選択は、一言で言えば、それでも政治を信頼するという選択であったと言えないだろうか。

そもそも、民主主義とは、国民が自らの将来の選択を自由意思によって政治に委ねるという制度である。それには、信頼する側とされる側の双方に「覚悟」が必要である。政治家や行政官は、そもそも「信頼に足る」存在でなければならない。それには信頼を受け止め得る存在に自らがなるとの覚悟がなければならない。しかし、100%の信頼できる人間など存在しないかもしれない。そうであれば、有権者も、それでも「政治を信頼する覚悟」をもつ必要があるのである。

そうした意味での指導者と有権者の心の触れ合いと硬い結びつきが日本政治から失われていないだろうか。

しかも、今回、ポーランドの民主的野党担う政治家たちと彼らに期待する有権者の熱量は、間違いなく、与党のそれを凌駕した。政権を作り出し、それを支える有権者と政党の結合を「同志的結合」というのであれば、政権交代とはそういう形で起きるのだということを、ポーランドで筆者は思い出したのである。

本シリーズの最初に述べたように、1980年代のポーランドにおいて日本は模範国であり、憧れの国であって、多くのポーランド人が熱心に日本語を学んで呉れている。滞在の最後に、筆者はポーランドから逆に日本政治を活性化させる方法を学んだのかもしれない。今後も、ポーランド政治の行く末を見ながら、機会を見付けて改めて日本政治のあるべき姿を機会を見付けて思い描いてみたい。

これで筆者のお粗末なポーランド便りはおしまいである。筆者はこれをロンドンヒースロー空港で書きあげて、二番目の滞在先の台北に向かう予定である。

筆者のポーランド滞中に欠かせなかったのが受け入れ先のワルシャワ大学東洋学部日本学科の存在である。私のポーランド滞中は、第17回の日本祭にも協力することが出来、充実した毎日であった。学科長のアグネシュカ・コジウラ先生をはじめ、日本研究の第一人者であるエヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ先生以下、皆様に感謝申し上げる。

特に、本シリーズで触れた様々な旅行、体験の企画・計画は、カタジナ・スタレツカ先生のお力添えがなければ到底実現できなかった。日本社会・日本政治の複雑な壁までつかみ取ろうとするその態度や政治や歴史認識をめぐる卓越した理解力を持つ彼女に、心からの感謝を捧げたい。願わくは私のポーランドの政治や歴史理解も、彼女のようなきめ細かさがあれば。

また、長年ポーランドを舞台の一つとして活躍されている憲法学者・国際政治学者の鈴木輝二先生やポーランドの日本語教育の最大の功労者でまさに「先生」と呼ぶにふさわしいワルシャワ大学の岡崎恒夫先生とのお話は私のポーランド理解を深めて下さった。また、日本人会の石塚芳明様、北御門強様、金子泰先生、Tom Hashimoto 先生、同じ時期に在外研究をご一緒させていただいた矢嶋光先生からの数々のご教示にも感謝申し上げたい。もちろん、理解の過ちや不足はすべて筆者の責任であることも明記したい。

また、共産主義時代や国境問題、歴史認識問題についてなど、ここに書いていないこともまだまだもう少し残っている。いずれ雑多な考えを整理して、改めて小さな論考を著したい。それがお世話になった皆様への筆者なりのささやかな恩返しだと思っている。なお、本稿のポーランド政治理解については、多くの文献や記事を参考にした。膨大になるので、博物館の URL 以外は割愛させていただくが、特に小森田秋夫先生のワルシャワ大学日本学科で 2023 年 10 月に行われた講演資料を活用させていただいた。記して感謝申し上げます。(了)

ヨーロッパ連帯センター

Europejskie Centrum Solidarności

pl. Solidarności 1 80-863 Gdańsk

tel. 58 772 40 00

<https://ecs.gda.pl/en/>

シレジア自由と連帯センター

Śląskie Centrum Wolności i Solidarności

ul. Wincentego Pola 38 40-596 Katowice

tel. 32 601 21 08

<https://scwis.pl/>